



# 明治大学図書館 第15回書評コンテスト

## 受賞作品集



2025年度





## 目 次

第15回書評コンテスト結果発表	3
講評（副館長 三浦 太郎）	4
書評コンテスト受賞作品	7
奥付	19



# 第15回 書評コンテスト結果発表

明治大学図書館書評コンテスト選考部会による  
厳正な選考の結果、下記の12作品の受賞が決定しました。



	所属・氏名	書評対象図書 / 著者名
最優秀賞	法学部 4年 大野 直心音	アルジャーノンに花束を 新版 / ダニエル・キイス 著
優秀賞	商学部 3年 大久保 陽菜	塩の街 / 有川浩 著
優秀賞	法学部 2年 小田長 心花	流浪の月 / 凧良ゆう 著
特別賞 (紀伊國屋書店賞)	理工学研究科 1年 寺島 稔七	川のほとりに立つ者は / 寺地はるな 著
特別賞 (三省堂書店賞)	農学研究科 1年 前田 侑輝拓	田園交響樂 / アンドレ・ジイド 著
特別賞 (三省堂書店賞)	法学部 1年 岡田 拓歩	ヘヴン / 川上未映子 著
特別賞 (丸善雄松堂賞)	国際日本学部 1年 飯間 桃子	月と六ペンス / サマセット・モーム 著
佳作	商学部 3年 若林 里帆	白痴 / 坂口安吾 著
佳作	文学部 2年 関口 愛菜	傷を愛せるか 増補新版 / 宮地尚子 著
佳作	法学部 2年 堤 智希	きみの友だち / 重松清 著
佳作	農学部 3年 小倉 彩心	愛なき世界 / 三浦しをん 著
佳作	法学部 3年 木村 燿	新選組血風録 新装版 / 司馬遼太郎 著

# 講 評

書評コンテスト選考部会  
明治大学図書館副館長 三浦 太郎  
(文学部教授)

受賞された皆さん、おめでとうございます。

明治大学書評コンテストは、今回で第15回目を迎えました。前回は37名の応募だったところ、今回はそれよりも多い47名の方から応募いただきました。このコンテストは本学の学生・大学院生のみ応募することができ、書評対象は本学図書館に所蔵された図書に限られます。自分の考えを他の人に向かって表明するこうした機会を活用し、図書館蔵書に新たな光を当ててくれた皆さんに、まずは感謝の言葉を述べたいと思います。

選考の際は委員11名がすべての書評に目を通し、それぞれの持ち点を、各自が高い評価を与えた書評に配分していきました。結果的に、最も多くの評価点を得た1点を最優秀賞に選び、続いて2点の優秀賞、4点の特別賞、5点の佳作の授賞を決定しました。

さて、書評コンテストは書評を書いてもらう取り組みですが、日頃の読書で自分の感じたことを表現する手段として、図書紹介や感想文といったものもあります。書評といった場合には、内容の紹介にとどまらず、「評」という視点が大切となります。

試みに、図書館情報学の分野で中核的な学会である日本図書館情報学会の機関誌の「投稿規程」を見てみると、投稿原稿の種別に書評と文献紹介を挙げています。書評については、「最近（原則として2年以内に）刊行された図書館情報学関係の和・洋の専門書、研究書について、その内容を紹介するとともに、その学術的価値を批判的に検討した有用なものとする。翻訳書を取り上げる場合は、原書を参照のうえ、外国における先行評価も考慮することが望ましい」としています（下線引用者、以下同）。また、文献紹介については、「研究者にとって参考となる研究文献の内容を紹介するものとする」としています。

書評は、単に評書の内容を紹介するだけでは不十分であり、学術的価値の批判的検討を必要とすることを定めているわけです。いわば、内容の紹介に加えてひと工夫を求められるところが書評の肝であり、そこに面白さもあると言えます。

内容紹介と書評の違いについて、例えば、次のような事例を考えることもできます。図書館史の分野では、西洋古代最大の図書館として、しばしばアレクサンドリア図書

館に言及されます。これは、アレクサンドリア帝国の滅亡後、エジプトのプトレマイオス朝の新都アレクサンドリアに建てられた図書館で、学問所ムーゼイオンに隣接し、50万巻とも70万巻とも言われる膨大な数のパピルス書物を保存したと伝えられている機関です。4世紀までに消滅したため、どのような図書館であったかは、当時の記録や文書から推し量るほかはありません。

H.ペトロスキーという土木工学の研究者が『本棚の歴史』(池田栄一訳, 白水社, 2004. 中央開架 012.4/4//H) という図書を執筆しています。そこでは、アレクサンドリア図書館について、「世界中の本を集めることを目的とし、かつては何十万冊もの巻物を所蔵していたと考えられている。船が入港するたびに、そこから巻物を借りて図書館用に写本を作っていたのである。おそらく後世の作り話だろうが、アテネから巻物を借りてアレクサンドリアのために写本を作成したという言い伝えがあり、…写本が完成したとき、原本の巻物をエジプトに残して、写本のほうをギリシアに送り返したという」(p.28-29) と記されています。

当時はまだ紙が使われておらず、文字を書き記す媒体はパピルスでした。パピルスはその性質上、冊子体の書物ではなく卷子本の形で作られたのですが、そうした卷子本の写本を作る際、海港都市に停泊する船にパピルスが積まれていればこれを借り受け、写本作成のための原本としたというのです。この部分を含めてこの図書の内容を紹介しようとするれば、「アレクサンドリア図書館について、海港都市に停泊する船に書物が載せられていた場合、いったん預って書写したことが記されており、アテネから卷子本を借りて写本を作成したという言い伝えも併記されている」といった書き方になるでしょう。

ただ、ここで「巻物を借りて図書館用に写本を作っていたのである」と断定されている点については、疑問も起こるのではないのでしょうか。写本を作る場合があったかもしれないけれど、入港のたびに必ずそうだったのか。果たして、そのように言い切れるのでしょうか。

類書として、ブエノスアイレス国立大学図書館長などを務めた A.マンゲルという人の『図書館：愛書家の楽園』(野中邦子訳, 白水社, 2018. 中央開架 010.2/50//H) という本を見てみましょう。そこでは、「プトレマイオス王は、[あらゆる作家による書物の収集を目指すという、] みずからの野心をさらに広げ、アレクサンドリア港に到着した書物をすべて押収して写しをとるように命じた。原本は必ず返却すると重々しく約束された(しかし、権力者のもったいぶった言葉の例にもれず、この約束はつねに守られたわけではなく、写しのほうが返却されることも多かった)」(p.26-27) と記されています。

たしかに、プトレマイオス王が書物を網羅的に収集すべく命令を下したことは記されますが、入港船に対して必ず押収が実行されていたかどうかは明言されていません。もし、こちらの図書の内容をもとにアレクサンドリア図書館を紹介するのであれば、「海港都市に停泊する船に書物が載せられていた場合、押収して写本を作成するよう

命じられたと記されている」といった書き方になるでしょう。

プトレマイオス朝の海港都市に船が入港し、パピルス書物を載せていたとき、押収するよう命が出されていた可能性はありますが、例外なくそのように実行されていたかどうか、いまとなってはわからないというのが正直なところではないでしょうか。むしろ確実に言えることがあるとすれば、そうした言い伝えがまことしやかに残されるくらいに、古代アレクサンドリア図書館では膨大な数の書物が収集されたということではないでしょうか。

文献紹介は、対象となる本に書かれていることをまとめて紹介するものです。一方、書評は、書かれていることに基づいて、その妥当性を考えてみたり、そうした記述の背景に思いをめぐらせたりすることに、その特徴があります。図書に書かれた事柄に対して、自分なりの視点で、考えたところを記してみるのが大切です。もっとも、評書の中の、いずれの記述のいずれの内容に引っ掛かりを感じて評するかは、人によってさまざまです。内容の紹介にさらにひと工夫を加える仕方は、千差万別ということになります。

昨今、生成 AI の活用が広がり、文章データの要約などは瞬時にできるようになっています。学術的な世界でも、研究論文の作成などの際に、どのように適切に生成 AI を使うことができるかについて模索されている状況があります。ただし、文献やもっと広く世の中の事象を対象に、自分なりの問いどころを設定して、結果の妥当性を判断することは、相変わらず人の営みの重要な部分として残されています。今後も皆さんが、評すべき点を自らの力で見出し、思考したり言語化したりすることを通じて、自分なりの解を出していってくれることを期待し、講評に代えたいと思います。

# 最優秀賞

『アルジャーノンに花束を 新版』ダニエル・キイス著、小尾芙佐訳

法学部 法律学科4年 大野 直心音

知能の劇的な変化で人生はどう変わるのか——。本作では、知的障害を持つ中年男性チャーリーが画期的な手術によって一気に知能を高めた末に生じた変化を本人の日記形式で追体験する物語だ。物語の表層はシンプルだが、読み進めるほどに心を揺さぶる問いと、細密な心理描写が幾重にも絡み合ってくる。

まず、この作品の核は「知能の向上が本当に幸福につながるのか」という、誰もが一度は考える普遍的問いだ。主人公は術前、頭が良くなれば人間関係も美しく整い、自分の世界が広がると愚直に信じていた。だが知能が高まるにつれて、見えてくるのは今まで知らなかった周囲の冷たさや孤独、そして自分でも制御できない感情のうねり。親しいと思っていた人々との距離が広がり、仲間だったはずの存在を喪失する孤立感を味わう——知能の急激な変化により、心の成長や繊細な人間関係の変化に翻弄される主人公を知る中で、読者は幸福の本質について深く内省させられる。

加えて、科学の名のもとに実験材料として扱われる主人公の苦しみと、それを取り巻く科学者や社会の視点にも注目したい。実験の成功や研究成果が重視されるなか、主人公が個人として尊重されず、罪悪感や疎外感に苛まれる様子は、現代にも通じる倫理的問題を鮮烈に浮かび上がらせる。社会全体が障害者に対して向ける差別や無理解もリアルに描かれており、読者自身も「自分は本当に共感できているのか」と考えさせられてしまう。こうした構造により、この物語は単なるフィクションの枠を超え、社会や人間の本質を鋭く問う重みを持つ。

また、文体の巧みさについても特筆したい。原書は英語で、主人公チャーリーの未熟で稚拙な言葉遣いが文法的に乱れた形で表現されているが、日本語版含め、その他言語ではこの特徴をそのまま移すことは容易ではない。そのような中で特に小尾芙佐訳は、単語も文法もまったく異なる日本語において、チャーリーの言葉遣いの拙さを巧みに反映している。ひらがな中心の語りや誤字を含む文章で彼の未熟さを表現し、知能の成長につれて漢字や句読点も増え、表現が洗練されていく過程を視覚的にも感覚的にも伝えている。こうした訳者の細やかな配慮により、日本語を読む読者にも原書と同じリアリティと臨場感が生まれている。

知識や知能と幸せの関係を問い直し、障害者やその周囲の感情を深く掘り下げる——本作にはそうした文学らしい問いと、現代社会に向けて投げかけるメッセージが随所に詰まっている。知能の変化がもたらす孤独や知識の重さ、人間らしさとは何かという根源的な問いかけは、読み手の世代を超えて深く広く届いていくだろう。

人間の幸福、社会的な葛藤、倫理の問題などに少しでも関心がある人なら、一度この物語を手にとってみる価値は充分にある。高度な知能——その裏に潜む孤独や葛藤を通して、人間の本質について考えるきっかけを与えてくれる一冊ではないだろうか。

# 優秀賞

『塩の街』 有川浩著

商学部 商学科 3年

大久保 陽菜

『塩の街』は、私を「少女」にしてくれる本だ。2020年と2025年。この本は読み返すたび、その時々の私を映す鏡となり、私の根本を思い出させてくれる。2020年、高校1年生。「コロナ禍の子どもたちはかわいそう」という世間の空気に、私は違和感を覚えていた。制限下でも楽しみを見つけ、この状況でしか得られないものがあると信じたかったからだ。そんな時、『塩の街』に出会った。人が塩と化す「塩害」で崩壊した世界。絶望的な状況下、両親を亡くした主人公の女子高校生・真奈は「かわいそう」の対象だった。だが彼女は、変わり果てた日常で出会った自衛官・秋庭に恋をし、「秋庭さんに会うためにこんな世界になった」とさえ言い放つ。そのあまりにわがままな台詞こそが、「かわいそう」と決めつける世界への鮮やかな抵抗に思えた。非日常の中をまっすぐに生きる。その真奈の姿が、当時の私を導いてくれた。

そして2025年、大学3年生となった今。私は就職活動の真っ只中にいる。商学部で実学と文学を「ダブルコア」で学ぶ私は、いつしか「役に立つ」とされる自己啓発書や成功者のエッセイを横目に本屋を歩くようになっていた。すべてに意味を見出し、社会で何に繋がるかを計算する毎日。「好き」が消えてしまうことが、何より怖かった。このコンテストにも「就活のため」という打算が混じる。だからこそ、私は「役に立つ本」ではなく、本当に好きだと胸を張れる本で勝負しようと決めた。

高校生の私は「非日常」を生きる真奈に自分を重ねた。しかし、大学生の私は、彼女のまっすぐな「好き」に心を奪われた。自由なはずなのに、将来が定まっていく焦燥感を覚える今の私にとって、純粋な「好き」を貫く真奈の姿は、あまりにも眩しかった。

「来なくていいです、明日なんか。秋庭さんが行っちゃうならそんなもの要らない！あたし、世界なんかこのままでもいいもの！」

恥ずかしいほどまっすぐで、わがままな台詞。私が好きになった真奈が、そこにいた。

計算や効率を抜きにした、「ただ、この本が好きだ」という感情。『塩の街』は、そんな「少女の私」を何度でも思い出させる。皮肉にも、就職活動の自己分析を通して「自分の本気の言葉で、誰かの心を動かすことが好きだ」と気づいた。その「本気」の原点に、この本がある。私の価値観の根底にある強さ、「好き」を信じる心は、この物語が教えてくれた。これは「役に立つ本」ではないかもしれない。だが、これは打算を捨てきれないながらも、「好き」という感情を信じたいと願う、一大学生の等身大の書評だ。私が本気で「おすすめしたい」と願う、私の原点。どうか、この物語が、あなたの心にも届きますように。

# 優秀賞

『流浪の月』 凧良ゆう著

法学部 法律学科 2年

小田長 心花

月が満ちて欠けるように、真実もまた、見る角度によって姿を変える。

両親を亡くし叔母の家に引き取られた主人公・小学生の更紗は、従兄の孝弘から性的虐待を受け続け、学校が終わると公園で過ごしていた。そこには近所からロリコンと呼ばれる大学生・文がいた。ある雨の日、びしょ濡れの更紗を文は自宅に連れていき、更紗は彼のもとで二か月を過ごす。マスコミは彼女を行方不明の女兒として報道し、文は誘拐犯として逮捕され彼らの関係は終わる。そして15年後、更紗は偶然文と再開し、物語は動き出す。本作は、「女兒誘拐事件の被害者」・更紗と、「ロリコン誘拐犯大学生」・文の、成長と感情の機微を細やかに描きながら、彼らと世間の対立を通して「真実」とはいったい何かと読者に問いかける。

誘拐事件の被害者として報道されてから、更紗は世間から「ロリコンに誘拐されたかわいそうな女の子」と見られ、同情されてきた。対して更紗は、虐待から逃れ文に救われたと確信しており、何も知らずに己を憐れむ世間に反発し続けたのだ。本作映画のキャッチコピー、『真実は、二人だけのもの』の通り、物語は真実の不可視性に焦点を当てている。

しかし、真実が不可視であるということは、当事者である更紗の語る「真実」さえ絶対的に正しいものかどうか、常に問い直されねばならないことを意味する。更紗が文に対して抱いた感情は、純粋な恋慕だったのか。大切な両親を失い、従兄に性暴力を振るわれていた更紗にとって、文と過ごした2か月間は初めて安らぎを得られた時間であった。彼女の恋慕は、ストックホルム症候群——誘拐・監禁の被害者が犯人に好意的な感情を抱く病である——や、生存本能に基づく依存常態とも解釈されうる。更紗にとっての真実は「初めて自分を愛してくれた人がいたこと」であるが、心理的解釈上の真実は「非常時の自己防衛本能」となりうるわけであり、どちらが事実の全貌に近いのかは更紗本人にさえ分からない。「真実」は、視点によって容易に変容してしまう危うさを孕んでいるのである。本作の主題は、真実の不可視性に加え、不確定性・変容性にあると言えよう。ここに作者は本作の表題たる「月」をみた。

物語は、彼らがそれぞれの「真実」を信じ、求め、抗って生きる姿を描き出す。翻って現代を生きる我々は、「真実」とどのように向き合っているか。欠けた月を月の全貌だと信じ込んでいられないか。流浪とはさすらい歩くことを意味する。情報があふれかえる現代社会に吞まれているあなたにこそ、本作を手に取り月の全貌を追いかけてみてほしい。

# 特別賞 紀伊國屋書店賞

『川のほとりに立つ者は』 寺地はるな著

大学院 理工学研究科 博士前期課程 1年

寺島 稔七

私たちは、他者のことをどれほど知っているのだろうか。

これは本書を通して、何度も私たちに投げかけられる問いである。物語は、カフェの店長として働く清瀬のもとに、疎遠だった恋人・松木が事故で意識不明になったという連絡が届くことで動き出す。その理由を探る過程で、清瀬はこれまで見えていなかった彼の一面、そして自らのあり方と向き合うことになる。本書は、誰もが抱える「当たり前」や「正しい」といった先入観——無意識にかけている『フィルター』を見つめ直す作品だ。

「ひたすら他人の行動の表面的な部分だけ見て判断していると、いつか大切なことを見誤る時もあるのではないか」——これは清瀬が物語の終盤で得る気づきである。人は誰も「見せたい自分」を演じて生きている。本書には、家庭環境、性別、得意不得意など、多様な背景を抱えた人物が登場するが、その差異が他者の目には奇異に映ることもある。ゆえに、人は無意識に自分を「見えなく」してしまう。私たちはその表面しか見ることができない。態度、言葉、行動。その奥にある過去や感情さえも、本人の「自己申告」に頼るしかない。それらを私たちは見たいようにフィルターを通して解釈してしまう。自分の「できること」や、社会が「当たり前」とする価値観、それらは本当に「当たり前」なのか。そう見つめ直す機会は、実はあまり多くない。

そこで際立つのが、本書の構成の巧みさである。現在の清瀬と過去の松木という二軸が交錯し、物語が進むにつれて松木の背景や事件の全貌が明らかになる。その過程で、互いの印象が対比され、主観と客観が混じり合う。その構成が、自他との違いを実感させるのだ。

そして私たちは問われる——どうすれば他者と向き合えるのか。

他者の背景を理解し、共感し、寄り添おうとすることは大切だ。だが、その行為がやがて「理解者でいたい」「助けてあげたい」という自己満足にすり替わることもある。土足で踏み込むような関わりは、結局、自分の「正しい」というフィルターを通した行動にすぎない。フィルターを拭くことは、言葉ほど簡単なことではないのだ。

『川のほとりに立つ者は』——これは本書のタイトルであり、作中に登場する小説の一節でもある。その内容は省くが、水面のきらめき——表面にだけ目を向ける私たち自身を象徴している文言だ。そんな私たちはどうあるべきなのか。川底をのぞくのか、それとも水中に手を伸ばすのか。その答えを、私たちは考え続けなければならない。

本書はコロナ禍という、対面での関わりが制限された時期を背景に描かれている。しかしポストコロナの今、他者との距離は広がったままだ。だからこそ、一度立ち止まることが必要なのだ。深呼吸をしてもいい。1、2、3と数えるのもいい。自分の中の「当たり前」を見つめ直すことが、今の私たちに求められている。本書は、そのための機会を静かに与えてくれる一冊である。

# 特別賞 三省堂書店賞

『田園交響楽』 アンドレ・ジイド著、神西清他訳

大学院 農学研究科 博士前期課程 1年 前田 侑輝拓

「盲人もし盲人を導かば、ふたりとも穴に落ちん」——かつてキリストが説いたこの言葉は、本書の核をなす警句である。

物語は、スイスの田舎町で盲目の少女ジェルトリュードを保護した牧師の手記の形式で綴られる。風だらけの少女は、やがて快活で知性あふれる女性へと成長し、牧師はその変化を慈しんで見守る。文体は一貫して敬虔かつ誠実な語り口だが、読み進めるうちに、言葉の裏側に違和感が静かに膨らんでいく。やがて彼女は手術によって視力を得るが、直後、彼女は自ら命を絶ってしまうのだ。

この死は、単なる悲劇にとどまらず、物語全体に張り巡らされた信仰と欲望、偽善と贖罪というテーマを浮き彫りにする。

本書を読み解く鍵となるのが、プロテスタント的信仰に対するジイドの批評的眼差しである。牧師は、彼女への愛情を「神の御心」にかなった善意とみなそうとする。しかし、その愛は純粋なのだろうか。読み進めていくうちに、読者は信仰を盾に、欲望のために神を利用しているのではないか、という疑問を抱くだろう。実際、彼の息子ジャックは父の愛の中に欲望と偽善を見抜き、「墮落」であると糾弾する。ここに、プロテスタント的な「内面の信仰の正しさ」に対するカトリック的な倫理観がぶつかり合う。信仰が心の内面のみによって成り立つならば、それは自己正当化を許す危うさを孕むのである。その危うさを暴くように、視力を得た彼女は牧師にこう言う。「あなたが授けてくださる幸福は、何から何まであたしの無知の上に築かれているような気がしますの」。

彼女の「見えない世界」は、純粋な信頼と幸福に満ちていた。しかし視力を得た瞬間、信じていた世界は崩壊する。彼女が最後に瞳に映したものは、彼女を導いていたはずの牧師の偽善と罪の姿そのものであった。導かれる存在だった少女が、逆に導く者の盲目性を暴いてしまうという皮肉な話である。牧師は神を言い訳に、自身の内面すらまるで見えていなかったのだ。まさにかの警句の体現である。物語が牧師の手記という形式で語られることも、非常に示唆的である。読者が目にするのは常に彼の視点を通した世界であり、あくまでも彼自身の「真実」にすぎない。その文体は信仰に満ち説得力を持つが、それゆえ、事実は分からないのである。彼の独善が後半に浮かび上がってくる構成には恐ろしさすら感じる。ジェルトリュードという存在は、自らの信仰を美しく飾り立てるための“作品”であった。彼女が主体性を持ち、彼の善意から自立したとき、その関係は破綻する。視力の回復は、彼女にとっては精神的自由の獲得であり、同時に耐えがたい現実との対面でもあったのだ。

この作品は、神の名のもとに語られる善意が、いかにして罪へと転化しうるのかを、冷徹に描いている。読者に問われるのは、「誰かを善意で導いていると思込みながら、自らの欲望を正当化していないか」という、切実な問いである。宗教的な背景知識がなくとも、本書が投げかけるのは普遍的な問題だ。「善意のふりをした自己満足」「愛と欲望の境界」、これらは、生活の中で誰しもが直面するテーマであろう。

ジェルトリュードという“世界”を通して描かれるのは、盲目的な愛と偽善、そして失われた純粋さの物語である。だからこそ、この作品を手にとってほしい。ただの宗教小説としてではなく、私たち一人ひとりの生き方の在り方を問いかける鏡として。

# 特別賞 三省堂書店賞

『ヘヴン』川上未映子著

法学部 法律学科 1年

岡田 拓歩

常に強いものが正しく弱いものが間違っているとは限らないということ、それなりに長い時間生きてきた人ならば当然知っている。本書は、社会から拒絶され暴力を受ける人たちを通して、我々のもつ善悪や強弱についての固定的な価値観を問い直そうとする純文学である。

斜視に悩む中学生の「僕」は学校で壮絶な苛め（という言葉が生ぬるいと感じるほどの暴力）を受けている。「僕」は、みすぼらしい身なりを理由に同じく苛めを受けているコジマという女子と出会い、手紙を通して友情を深めていく。コジマは言う、自分たちは苛めに屈しているのではなく受け入れているのだ、と。そして、受け入れることは美しい弱さである、それはもはや強さなのだと言う。コジマは苛めから逃げることをよしとしない。なぜなら苛めを受け入れることは、強く、正しく、意味のあることだからだ。そしてコジマは、「僕」が追いつけなくなるほどに強くなっていく。

現代の私たちがコジマの考えに全面的に賛同するのは難しいだろう。昨今苛めが社会問題化し、不登校という選択肢がより一般的なものになっているからだ。大人たちは、苛めを受けたら逃げていい、無理して行くほど学校に価値はない、と言う。「逃げてもいい」というのは優しい言葉である。しかし、なぜ苛められている方が逃げなければならないのか。なぜ悪いことをしたわけでもないのに学校にいる権利を奪われなくてはならないのか。「逃げてもいい」は被害者を学校から消去し、問題をはじめからなかったことにするための言葉になってしまっていないだろうか。その言葉は本当の意味で弱い者に寄り添うことができる言葉なのだろうか。

コジマの言葉は、確かに今苦しんでいる人にとって厳しいものだろう。「逃げてはいけない」というのだから。しかし、コジマは虐げられている人の強さと正しさを認めてくれる。不条理に苦しむ人がいちばん求めている言葉は、『わたしは君が正しいと思う』というコジマの言葉ではないだろうか。人の弱さを認め、寄り添ってくれる。そのコジマの姿勢は、この小説、そして川上未映子という作家の姿勢そのものなのだ。

この作品を読んで、私は村上春樹の『壁と卵』という、かの有名なスピーチを思い出した。弱い卵と、それを押し潰す「システム」という壁。小説家は常に卵の側に立って物語を書かなくてはならない、という村上の決意表明である。本書は、まさに卵に寄り添って書かれた小説だ。しかし、決して卵の側から一方的に壁を批判する作品にはなっていない。単純な二項対立を避け、苛めの加害者側からも核心を突いた意見を述べさせ、読者に問いかける。ぜひ本書を読み、この問いかけに答えてほしい。人間の善悪や強弱、戦うことと逃げることについて、考えるきっかけにしたい。

# 特別賞 丸善雄松堂賞

『月と六ペンス』 サマセット・モーム著、金原瑞人訳

国際日本学部 国際日本学科 1年

飯間 桃子

初めに断っておこう、私はこの作品の登場人物が全員嫌いだ。しかし、それでもなおこの作品を紹介したくてたまらない。もう面白くてしょうがない。その理由は、登場人物の嫌な部分がないか生き生きとしているところにある。

語り手は知り合いの女性が夫に逃げられたと聞いて、その夫を説得しようとパリまで探しに行く。夫は画家で、ストリックランドと言う。最初は浮気かと思われたが、彼は絵を描くために今までの人生を捨てたと言う。信じられないが、どうも本当らしい。以前の無害な感じとは打って変わって、友人から金だの家だの奪い取っても気にしない。人を死なせても気にしない。ただ関心があるのは絵画だけという始末で、その様子は絵画の悪魔に取り憑かれたようだった。

このストリックランドがひどい人物なのに対して、他の登場人物はあからさまに不道德なことはしない。むしろ見方によってはかなりの善人だ。例えば画家友達のストルーヴェは病気のストリックランドをなんの見返りも要求せずに、懇切丁寧に看病してやっている。ところが、この小説で一番引き込まれるのは、部分部分でなんか嫌だ、と感じさせる人物の描写である。人の醜く、身勝手な部分を語り手の観察眼がどんどん暴いていく。小説を読んでいるつもりが、実際になんとかく馴染めない社交場に放り込まれたかのように、居心地が悪い。これはこの作品の欠点だろうか？とんでもない。この精密な人間らしさの描写こそ、登場人物に命を与えているのだ。いろいろしながらあなたは同時に感動している。本の中に生きている人間がいると。

ストリックランドは周りの人間の人生をどんどん悪い方向に変えていくが、最後に目的を見出し、新しい地で人生を終えることになる。ここで読者は、全く共感できなかったストリックランドに、初めて共感を覚えることになる。

あなたは全く知らない土地に郷愁を感じたことはないだろうか。自分の居場所は今の場所じゃないと思ったことはあるだろうか。これまでの物語の舞台であるパリから離れて、ストリックランドは自分の本当の居場所を発見する。これまでの行いが全て最後で昇華され、絵に取り憑かれたストリックランドの人生最後に描いた絵がありありと読者の目に浮かんでくるのである——この場面を読むためだけにこの作品を読んでもいい。決して後悔しないに違いない。

# 佳作

## 『白痴』 坂口安吾著

商学部 商学科 3年

若林 里帆

戦時下に書かれた小説の多くは重苦しい余韻を残し、読み終わると気持ちが沈む作品が少なくない。だが坂口安吾の『白痴』は不思議とそうは感じない。むしろ読了後、胸に熱を帯びるような感覚と、もう一度頁を開きたくなる衝動が残るのはなぜだろうか。

物語は第二次世界大戦下の混迷のさなかが舞台である。主人公伊沢は隣家の人妻である白痴の女が伊沢の家の押し入れに隠れていたことをきっかけに一緒に暮らすこととなる。そこから緊張と不安が張り詰めた異様な同居の日々が幕を開ける。

本作において、とりわけ魅了されるのは東京大空襲の戦火から脱出する場面である。ここでは戦争という極限状態が人間の心をどう変質させるかが集中的に描かれている。伊沢は空襲という死の現場にありながら女の自発的な意思を初めて感じ取り、その一瞬に自分の存在理由と誇りを見出す。ここで示される愛は相手を守るための責任感というより自らの救いを相手に求める形を強く帯びている。「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。」女を抱きしめる伊沢の言葉は現実の破壊から目をそらし自分たち二人だけの世界へ閉じこもろうとする意思の表明であると言える。

戦時下における愛のかたちを描くこのクライマックスは戦争が人を守りたいという自然な感情さえ歪め、自己の存在証明に転化させてしまう残酷さ示している。人間が希望や未来を奪われた時、なお愛と呼べる関係が成立するのか本作は明確な答えを提示しない。その余韻こそが、この作品を唯一無二の存在にしているとも言える。

ようやく戦火から逃れられても救いは無かった。隣に女がいることにすら価値を見出せないほど伊沢の心は摩耗していた。それでも二人が肩を寄せ合い歩き出そうとするのは破壊しつくされた世界で頼れるものが互いの体温しかなかったからだ。

物語は「俺と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそそぐだろうか」と伊沢は考えていた。あまり今朝が寒すぎるからであった。」という一文で終わる。白痴の女が示した小さな意思表示は伊沢を一時的に支えたものの、それは単なる空襲のさなかにおける異常な輝きであり持続性を持たなかった。そのことが「豚」という表現に象徴されている。

本作に描かれる愛には晴れた未来は無いが戦争が奪おうとする最後の砦を必死に抱え込む姿がある。そして時代を超えて人間にとって愛とは何かという問いを私たちに突きつけてくる。戦時下という極限状態を描きながらも読者を惹きつけるのは愚かしくも人間的な姿がそこにあるからだろう。そしてそれは本来の私たち自身の姿を映す鏡であるのかもしれない。

# 佳作

## 『傷を愛せるか 増補新版』宮地尚子著

文学部 文学科 2年

関口 愛菜

傷とは、なんでしょう。転んだ時にできた擦り傷、スマホのかけた表面、こころの痛み、ただ傷といっても様々なものが浮かびます。絆創膏を貼ったり、新しいものに変えたり、優しい言葉をかけたり、それぞれの傷によって対処法があり、私たちは傷を治すためにどうすればよいか考えます。このように私たちは無意識の中で「傷は治すもの」として認識していますが、本当にすべての傷は治せるものなのでしょうか。

精神科の医師である著者は生きていく中で傷に対する多くの対処法を見出します。見知らぬ土地の寺院で全く知らない僧に祈ってもらったことで「祈り」の持つ力に気づき、傷を負った患者に対し、時には「しあわせになりますように」と祈ったり、時には「きつとしあわせになれるよ」と予言します。治すことだけが傷への対処ではなく、その傷があることを認め、共に生きていき、傷を愛せない自分自身を愛するその姿勢が傷への対処法になることが描かれます。

著者の文には「絶対」という言葉がありません。絶対的なものでない文章は一見脆そうに見えますが、弱さゆえの強い意志や希望というものを孕んでいます。凝り固まらず、人も物も傷も変わっていくということを受け入れ、背伸びもしなければ卑屈もせず常に等身大である姿が愛おしく、また美しく感じられます。どちらが正しいといわず、結論が出ないという結論を出します。

本の中で vulnerability という言葉が出てきます。「脆弱性」、「攻撃誘発性」と訳されるこの単語に矛盾を感じる著者ですが、未来の不確実性や絶対的な安全がないこの世界で、人々は弱さを抱えたまま強くある必要があると彼女は言います。強さだけに気を取られて弱さに気づけなくなってしまった時、弱さが前面に出て攻撃の対象となってしまうということです。弱さそのものを美しいと思うことが強さになるのかもしれない。

この本を読んだ人の中には楽になる方を選べばいい、という著者の感覚に対して「綺麗ごとだ」「甘えている」という感想を残す人もいるかもしれません。世間は冷酷で思い通りにならないことの方が多くそれにより傷を負うこともあります。しかしそれでいいのです。傷ができてしまうことは当たり前で誰でもその傷の痛みを感じながら生きています。著者はその痛みはどう寄り添えるかを述べています。傷を作らないようにするのも大切ですが、傷を受け入れて生きることもまたこの世界では大切なことです。

今の時代、常に殺気立った競争社会や SNS の普及による情報過多で今まで以上に様々なことに敏感になり、他人や自分までをも傷つけてしまうことが当たり前になっていますが、立ち止まってそこにある傷や痛みに向き合い、自分の弱さや脆さを受け入れること。傷を治せるものだと思わずにいいこと。もしわからなくなったらぜひこの本を手にとって傷を愛せない自分を存分に愛してください。この本はいつでも両手を広げてあなたを待っています。

# 佳作

## 『きみの友だち』重松清著

法学部 法律学科 2年

堤 智希

友だちとは何だろう。毎日顔を合わせて他愛もない話をするだけで、それは友情と呼べるのだろうか。それとも、言葉を交わさずとも、互いの痛みや孤独に静かに寄り添える関係こそが、本当の友情なのか。重松清の『きみの友だち』は、そんな問いを読者の心にそっと置いていく連作長編集である。

本書は謎の人物が語り手となり、一話一話異なる主人公を据える。語り手は、登場人物たちを「きみ」と呼び、それぞれの視点から「友だち」とは何かを語っていくのだ。視点も時系列もバラバラに展開される物語は、やがて一本の線となって収束し、最後には語り部の正体までも明かされる。いわゆる、“あとから分かるおもしろさ”というやつである。

物語は、事故で片足に障がいを負った恵美と、腎臓の病気を抱えて入退院を繰り返す由香の友情から始まる。かつてクラスの人気者だった恵美は、事故をきっかけに心を閉ざし、次第に孤立していった。一方の由香も、病気のために友だちとの関係に距離を置かざるを得なかった。互いに孤独を抱えていた二人が出会い、ゆっくりと信頼と理解を育んでいく過程には、表には見えない関係の深さが滲む。他人の目には、傷を舐め合うような関係に映るかもしれない。けれど、その内側には、確かな絆が息づいている。

重松は、友情の“明るさ”だけを描くわけではない。むしろ、すれ違いや嫉妬、そして別れといった“陰”の部分を通して、人と人との関わりの複雑さを描き出していく。友情とは、ただ仲良くすることではなく、相手の痛みに向き合う勇気でもある。物語を読み進めるうちに、友情とは完成された形ではなく、揺れ続ける過程そのものなのだという事に気づかされる。

現代では SNS を通じたやり取りが日常の一部となり、言葉やスタンプひとつで感情を伝えることが当たり前になっている。しかし、作中の子どもたちが見せる、戸惑いや衝突を伴ったリアルで生々しい関わり方を思い返すと、そこには画面越しのやり取りでは決して感じ取れない“ぬくもり”や“間”のようなものが確かに存在しているように思える。便利さの裏で失われつつある人と人との触れ合い——そのかけがえのなさを教えてくれる。『きみの友だち』は、友情の喜びや難しさ、互いの距離感や孤独を描きつつ、読み手にさまざまな思いを抱かせる一冊である。

# 佳作

## 『愛なき世界』 三浦しをん著

農学部 生命科学科 3年

小倉 彩心

『愛なき世界』という題。「愛」をいくつかの辞書で調べると、「いつくしむ」の語が頻発する。それのない世界なんて……。冷徹でそんな世界など考えたくもない。ページを進めるとそれは杞憂であったことに気が付く。「愛なき世界」という題意の深みに一本取られたという気になった。その語の指すものは、愛のないと揶揄される植物の世界。植物を研究している者や農学部でないと何気なく通り過ぎてしまいがちなその世界を文学に落とし込んで掬い取っている。研究に生活を捧げている研究者と修行の身である料理人の暮らしがそこには見える。タイトルからは想像できないような熱い「想い」がそこにはある。彼らを突き動かす原動力である植物への想い、料理への想いは、職務からくる義務感ではない。読み進めるうちの「『愛なき世界』とは？」という疑問から、「私の愛する世界はどんな世界なのか」という疑問への変遷を是非体感していただきたい。

三浦しをん先生と言えば、映画化された『風が強く吹いている』や本屋大賞を受賞した『舟を編む』が有名だ。これら二作品と本作の共通点として、何かに熱中する人が描かれているという点が挙げられる。深い取材を参考に描かれているその世界観は圧巻だ。作品に出てくる装置や道具は実際にそれを利用して研究するようになった今読み返すと、本作の執筆にあたって三浦先生が取材を重ねたということをよく感じられる。単行本として手に取った中学時代には、想像しながら読み進めていたそれを実際に手に取った時、改めてその再現性の高さに圧倒された。上下巻に分かれる文庫本も出ていて、その巻末にはきちんとイラストでそれぞれの器具が描かれている。それもリアルである。フィクションの文学作品でありながら、事実を織り交ぜられている三浦先生の作品の強みであると言える。

また、是非味わってもらいたいのは、表紙をめくると現れる見返しの美しさである。デジタルの充実する今に抗うようなアナログの触れられる美しさ。素敵な装丁を楽しめるワクワク感がありつつも、読破できるのかという若干の躊躇いと葛藤もあるだろう。しかし、それは実際の研究の世界を照らし出しているという強みの裏返しである。文系の人には、理系の研究の話だと避けられるかもしれない。理系の人には、そんなに長い活字の羅列なんて読めないと言われるかもしれない。どちらの人にとっても距離をとりたくなるような物なのだとしたら、この素敵な装丁を眺めるためというだけでも一度手に取ってほしい作品である。さらに踏み込むことができたなら、何かに熱中する人に触れて、きっと挑戦心を掻き立てられることだろう。

# 佳作

## 『新選組血風録 新装版』司馬遼太郎著

法学部 法律学科3年 木村 燿

「人間というのは、どうやらそんなものらしい」

この言葉こそが、本書から受けた印象そのものである。

この本は、幕末に活躍した新選組を題材にした15篇からなる短編集である。新選組といえば、近藤勇や土方歳三、沖田総司などが有名だが、これらの人物だけではなく、様々な隊士の視点から物語が語られていくため、新選組を多角的に捉えることができる。池田屋で起きた有名な事件から、マイナーな出来事まで収録されており、寂寥感に襲われるものから、滑稽な話まで幅広く存在している。血による肅正が当然の世だったため、どの話も血生臭く、血風録の名に相応しいものとなっている。時代の転換期である幕末に生きる新選組の隊士たちの姿が、ありありと感じられ、人斬りとしての葛藤、夢に向かって奔走する姿を鮮明に描き出している。

私は本書から、「人」そのものについて考えさせられた。それはなぜか。今も昔も人間の本质は変わっていないからである。色恋沙汰で没落する者、嫉妬に狂う者、出世欲で身を滅ぼす者など、動乱の世、幕末の人斬りの時代であっても、人間の考えることは同じなのだ。どれだけ恐れられていた新選組であっても、「人」なのである。今と大きく異なる点は、明日を迎えられるかどうか分からない時代であったため、毎日をひたすら必死に生きる、その気持ちだけなのだ。守るべきものができると、死への恐怖が生まれるといった描写は、実に人間臭いものである。人間とは簡単に変化する。あまりに単純で、あまりに儂い存在なのだ。このように、人斬り集団といった苛烈さ、残忍さ、それとは対極的な人間味を感じる部分の両面が描かれていることが本書の最大の魅力である。

短編集であるため、新選組の成り立ちや歴史といった時代の流れは掴みにくいものであるが、より詳細に各隊士に焦点を当てた物語であるため、隊士がどのように生きていたかといったリアルな空気感を感じ取ることができる。一方で、著者は歴史家ではなく、小説家であるため、あくまで脚色された、創作されたものであるということは心に留めた上で読むべきである。

死を恐れていない新選組の在り方は、現代から見ると異端であり、恐ろしく見えるだろう。だが、彼らの死への恐怖を支えていたものは何か。それは夢や野心、信念といったものや、死生観の違い、そして厳しい隊規の存在である。彼らにとって、規律を破ることは死と直結するため、常に死と隣り合わせであることを自覚していた。特殊な環境に身を置き、「誠」という信念を貫いた結果の上で成り立ったもの、それこそが新選組である。

環境や時代、心の在り方によって人間は変化する。冒頭に引用した言葉のように、人間とは何者にでもなれ、何事にも慣れる存在なのだ。ただ恐れるのではなく、その奥にある心そのものを感じ取ってもらいたい。「誠」という旗の元に集った、そして縋った新選組の生き様を、

いざ、ご照覧あれ。



2026年2月発行  
編集・発行 明治大学図書館



〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1  
TEL:03-3296-4250  
URL: <https://www.meiji.ac.jp/library/>

